98　風そよぐ　ならの小川の　夕暮れは　禊ぞ夏の　しるしなりける

藤原家隆



清流

〈声に出してよんでみよう〉

カゼソヨグ　ナラノオガワノ　ユーグレワ
ミソギゾナツノ　シルシナリケル

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では［wo］と発音されていました。11世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が［o］から［wo］に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに17～18世紀頃、両者ともに［o］と発音されるようになり、現在に至っています。

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

〈どんな意味だろう〉

風がそよそよと楢の葉を揺らしてそよぐ、奈良の小川の夕暮れは、
（もう秋風かと思われるほどの涼しさだが、）
禊こそ、今がまだ夏であるしるしだったのだなあ。

＊「なら」には、「楢」と「奈良」の意がこめられています。このように、同音であることを利用して1つの表現に複数の意味を持たせる和歌の修辞技巧を、「**掛詞**」と言います。掛詞には、31音という限られた形式の中に、重層的な意味を持たせる効果

があります。「奈良の小川」とは、京都市上賀茂神社の本殿近くの奈良社の前を流れる川を言います。

＊「禊」とは、水で汚れを洗い流して清らかにすることです。よく、汚職などで辞任した政治家が、次の選挙で再当選し、「禊を済ませた」などと言っていますね。

＊この歌は、陰暦六月三十日の、「水無月祓え」「夏越しの祓え」 を詠んだものだと言われています。現在の暦で言えば、八月上旬頃にあたるそうです。１年が半分過ぎたところで、身を清め、残る半年を無事に過ごせるよう祈った年中行事の１つです。

春			夏		
一月	二月	三月	四月	五月	六月
睦月	如月	弥生	卯月	皐月	水無月

秋			冬		
七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
文月	葉月	長月	神無月	霜月	師走

〈解説〉

平明で清澄な詠みぶりの歌です。残暑の中、楢の葉を揺らしてそよぐ風の涼やかさ・さわやかさが、伝わってくるような気がしませんか？

〈作者と出典〉

作者の**藤原家隆**（1158-1237）は、平安時代末期から鎌倉時代前期に活躍した歌人です。『百人一首』の撰者である藤原定家と同時代で、定家と並び称される優れた歌人でした。定家と家隆は、ともに、８番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である**『新古今和歌集』**の撰者の一員です。この「風そよぐ」の歌の出典は、９番目の勅撰和歌集である『新勅撰和歌集』（1187 成立）です。

[1] ハ行の子音は、8世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。